

ヒアリパニック顛末紀

村上, 貴弘
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1916260>

出版情報 : 決断科学. 4, pp.67-71, 2018-03-23. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン :
権利関係 :



ヒアリパニック顛末記

村上貴弘 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター

2017 年 6 月 13 日（火曜日）、突然研究室の電話が鳴り止まなくなった。そこからの 2 ヶ月間、まさにヒアリパニックともいえる騒動に巻き込まれた。その顛末をここにまとめてみたい。

まずはヒアリとはなんだ？ というところを簡単にまとめてみたい。

このアリはアルゼンチン、ブラジル、パラグアイの 3 カ国が国境を接する地域が原産だ。ここを流れるパラナ川という大河周辺に多く生息している。学名は *Solenopsis invicta* という。Solonopsis は「管状の」、invicta は「征服されざるもの」という意味だ。

写真 1 にヒアリの写真を載せた。体長は 2.5 mm – 6.0 mm。頭部と胸部がやや赤みがかり腹部は黒い。形態的には日本にいる普通種のアリたちとそれほど大きな違いはない（東ら、2008¹）。

大きな特徴はソレノプシンという毒を持つことだ。ソレノプシンはアルカロイド毒で細胞膜の破壊、神経伝達経路の障害を引き起こす。また、ごくわずかだが Sol 1-4 という 4 種類のタンパク毒も持っている。この毒を腹部末端にある毒針から敵や食料となる動物に注入し、動きを止め防御や

1 東正剛、緒方一夫、Sanford Porter (2008)「ヒアリの生物学」海游舎。



© 九州大学ヒアリ研究チーム

写真1 ヒアリ (*Solenopsis invicta* Buren) の働きアリ。腹柄節が2つ、触角の先端2節が太い、前伸腹節末端がなだらかなら、頭部と胸部が赤みがかり、腹部が黒いといった特徴がある。

採餌を行う (村上, 2017a)²。

1930年代にアメリカ合衆国にアルゼンチンのブエノスアイレスから貨物に紛れて持ち込まれて以降、2001年にニュージーランドとオーストラリア、2004年に台湾、2005年に中国南部に侵入している。アメリカでは年間5000-6000億円の経済被害と少なくとも50-100名程度の死者が出ている。オーストラリアではこの15年間で275億円、台湾は年間2億円の対策費用を税金から拠出しているが根絶には至っていない。なんとも「厄介な」アリである (村上, 2017b)³。

僕とヒアリの出会いは1999年、18年前に遡る。当時学振の海外特別研究員としてテキサス大に所属していた僕は、テキサス中に生息していたヒアリにずっと悩まされていたのだ。1910年に書かれた名著「Ants」(W.

2 村上貴弘 (2017a) ヒアリの毒 現代化学 558:44-45.

3 村上貴弘 (2017b) ヒアリの生態 昆虫と自然 52(11): 27-29.

M. Wheeler 著)の中に非常に希少な菌食アリがテキサス州オースティン周辺に生息していると記載されていたのだが、そこがことごとくヒアリに独占されていてほぼ見つけれられない状態になっていたのだ。

その際に、ヒアリに10回ほど刺され「やばい、これ場合によっては死ぬだった」と思ったものの、膿疱ができて終了だったため、「なんだ大したことないな」という印象だった。しかしながら、オースティン市内にはいたるところに「fire ant control!」の看板があり、駆除会社だらけだった。公園や庭先でヒアリ駆除のための作業が行われているのも日常茶飯事だったし、これはかなり厄介なアリだ、ということも認識できた。

2003年に帰国後、北大の東正剛教授と協働でヒアリ研究に関し意見交換をし、東氏は2005年から科研費を取得、僕は2008年から調査に参加。台湾、フロリダ・テキサス、ベネズエラ、アルゼンチンでヒアリの調査を行った。その際に、合計60回以上刺され、台湾で2回、アルゼンチンで1回、軽めのアナフィラキシーショック症状が出ており、どんどん免疫反応が過剰になってきている。次は気をつけなくてはならない(写真2)。

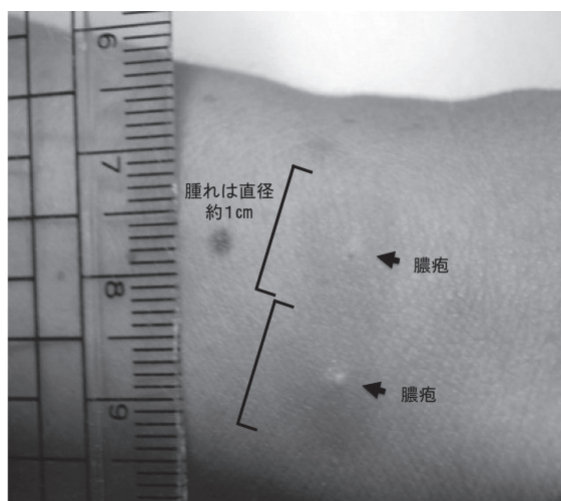


写真2 台湾で2009年8月にヒアリに刺された痕。刺されて30分後の様子。この後、動悸、めまい、悪寒、手のふるえ、ピント調節障害が出た。

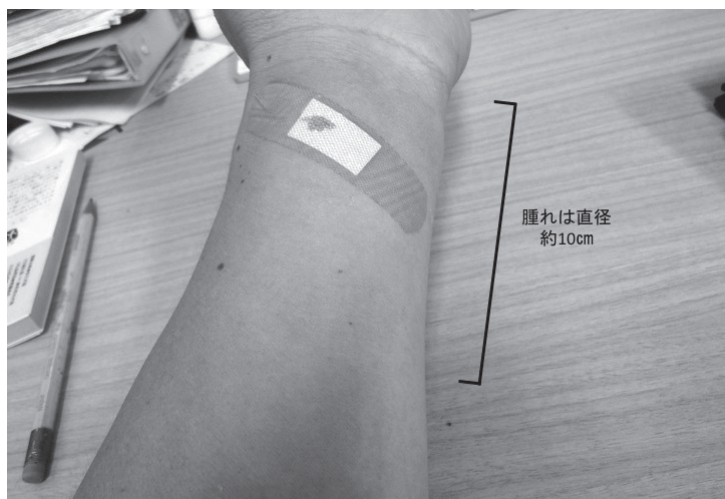


写真3 台湾で2017年8月にヒアリに刺された痕。刺されて10時間後の様子。刺されて30分後に、喘鳴（喘息はもっていない）、呼吸のしにくさを感じた。

さて、そんな状況の中、2017年6月13日を迎えた。ヒアリがついに日本に上陸し、日本中がパニック状態に陥ってしまった。これまで、学会発表や本の出版、エッセイなどで注意喚起をしてきたはずなのに、日本の人々にヒアリについての基礎知識はまったく浸透していなかったからだ。

そのあとの取材攻勢は、僕の予想を遙かに超えたものとなった。

ヒアリ関連の取材を受けた媒体は、テレビ、ラジオ、新聞、インターネットである。本数は正確に集計していないが、最初の1週間で約30件、そこからさらに取材攻勢が8月中旬まで続いたので、単純計算で300件近い取材を受けたことになる。

その中で最も時間をかけて、正確な情報が流せたのが「ニコニコ生放送」であった。台湾からの生放送を36時間連続で放映するという地上波放送では不可能なことができた。36万人の視聴者があり、さまざまな疑問に対して即応的に対応でき、台湾の研究者の英語でのレクチャーを流したり、ヒアリの巣を野外で観察したり（写真3）、室内で固定カメラにより長時間観察したり、とかなりの可能性を感じた放送であった。

次に丁寧な対応が、ラジオ番組であった。7 件のラジオ番組に対応したが、すべてきちんとした台本が用意され、取材も丁寧に落ちて話をすることができた。

インターネットではほぼ日刊イトイ新聞での記事がきちんと発信できたと思われる。Abema TV でもネット配信された。こちらにも刺された経験者を 3 名集めて、かつアメリカ生まれのパトリック・ハーラン氏（パクン）が司会者であったため、冷静な議論ができたと思っている。

問題は、新聞、週刊誌、テレビの 3 つの媒体だ。この 3 つの媒体に共通した特徴は、(1) 行政の発表を基本的には信じない、(2) センセーショナルなタイトル・内容を書き立て、その火消しに専門家を使う、(3) 言い放して責任を取らない、の 3 点だ。とくに (1) と (2) は非常に厄介な特質で、これは視聴者のニーズにも合致しているのかもしれないが、地道な作業をするための妨げになることが多かった。

実際の駆除作業に関わる論考は、別の論文でまとめているので、そちらを参照して頂きたい（Murakami, 2018⁴）。

今回、これほどまでに多くの報道がなされることによって、2017 年 6 月上旬まではヒアリの知識がゼロだった日本国民のほぼ 100% にヒアリという外来種の存在を知らしめた、という意味ではマスメディアの力を実感している。その点からいっても、国費で研究をしている研究者としてはボランティアに取材協力することに異議は差し挟まない。しかしながら、それと表裏一体の問題点も上述したように生じた。そのことも引き受けながら、今後もメディア対応およびヒアリの実際の駆除作業をしていきたいと考えている。

4 Murakami Takahiro (2018) Three case studies for control of invasive alien ant species, fire ant (*Solenopsis invicta*, Formicidae) in Japan. Decision Science Journal 4: in press.